

『産業教育』一九六一年九月号(小学館)

## 産業技術教育としての農業教育

矢口 新

### (一)

ある農業の専門家が農業高等学校の教育を批判してこういうことを言ったことがある。三年間の農業高等学校で、ただ一度しか稲についての学習をしないということが、今の高等学校教育のもっている根本的な問題であるというのである。このことはよく考えてみる必要がある。これはある意味でいえば、学校の教育が農業の教育とは本質的にあわないものだということになるかも知れない。学校の教育は一定のカリキュラムをもっていて、それにしたがって一定のプログラムの教育が行なわれている。そのプログラムは、学校という教育の形態からどうしても守らなくてはならぬ枠をもっている。少なくともそう考えられている。教科書を見ると、稲のことは、あるページからあるページまでに書かれてあって、その順序で教育は行なわれる。稲の生育は一年の春から夏を通して秋に至って終るわけであるが、学校で行なう稲の教育は、教科書の順にしたがってある時期に稲の生育とは関係なしに行なわれている。そしてそれが三年間の学校教育の中でただ一度しかない。もちろん実習はあるが、それは、高等学校の教育の中枢を占めていない。そういうことで果して稲を育てる仕事にたずさわる農業者の教育となるであろうか。

これは稲ばかりではない。その他の何についても同様なことが言える。たとえば牛の飼育についての教育も、教科書にある牛についての説明が中心になっている。生徒は学校に飼育されている牛(それも一頭か二頭の牛である)の当番をやるのがせいぜいで、三年間に牛の当番を五、六回やればいい方である。その当番も農夫の手伝いをする程度であるから大してやったことにならない。

こういう風に見てくると、農業高校の教育は農業の世界の中へ入って行なわれていない。外からながめて理くつを言っているという形である。こういう農業教育に不満の人々は、これと全くかわった農業教育をやろうとしている。それは昔からあった、修錬道場式の教育である。農林省の経営伝習農場などの教育もどちらかといえばその系統に属する。これは理くつ抜きである。技術伝習ともいべき方法で全く見よう見まねでやる。ひたすら額に汗をして、働くことである。そこには科学的といわれる雰囲気はすくない。伝統的な農業を身体で覚えるというやり方である。しかしその教育は農業高等学校の教育のように農業の世界の外からそれを眺めている教育ではない。農業の世界の中へ入って、その生活に同調しようとする所から教育がはじまる。商人や職人の教育における徒弟式の教育である。それは伝統的な行動形態に従うから、その科学的な分析や説明は二の次である。したがってその教育に科学的雰囲気が稀薄なのは当然である。しかし技術になれる教育としては高等学校の教育よりはるかに力をもっている。

もう一つ農業に関する教育では農林省の普及事業として行なわれている4Hクラブなどにおけるプロジェクト方式によるものがある。これはすでに農業の世界に入って農業を営んでいる者に対する教育の方式という形で行なわれている。前の二つは、専ら教育をうけようという者に対する教育の方式として成立っているが、このプロジェクト方式は、現に農業生活を営んでいる者に対するものとして成り立つ

ている所に大きなちがひがある。4 Hクラブのメンバーは二十才前後のものも多く、この頃まで多かれ少なかれ農業の生活の中に入っているものが、何かプロジェクトをみつめて研究をするという形になっている。そうしてそれが技術普及にもなるわけである。これは戦後著しく発展したものであつて、この形で非常に多くの農業青年が農業研究を行なうようになったことは注目すべきことである。その点からみれば、4 Hクラブは非常に大きな教育的意義をもっているといえるのである。

この教育は農業の営みの中で行なう教育である。その点では高等学校の教育よりは、経営伝習農場の教育に近いといえる。しかしただ技術の伝習をするのではなく、むしろ科学的に研究を行なわせようということが目標となつてゐる。しかし農業の世界に入ってそれを研究しようということになれば、とても初心者ではできない。4 Hクラブのメンバーがどうしても二十才前後の青年になるのはそういう理由がある。中学校を卒業して農業の世界に入ったものでは、まだプロジェクトをもつてクラブ員として活動することは不可能に近いようである。農林省では、中学卒業直後の年少の者が4 Hクラブのメンバーに少ないことを気にして対策を考えているようだが、今のような考え方で、今のようなプロジェクトを中心にした4 Hクラブでは、年令はどうしても二十才前後にならざるを得ないと言ふべきであろう。このことは、農業技術教育に対するひとつの問題を提示しているとも言えよう。かくのごとくさまざまな教育があつて、さまざまな形で農業自営者の教育を行なつてゐるが、それらはそれぞれのような特質をもつてゐるであらうか。こういう問題を出すのは、この三つの形のうち、どれが一番すぐれているかなどということの問題にするのではない。もとよりさまざまな教育があつてよいがこの三つのものを比較検討してみると、そこに農業生活者にふさわしい教育が明らかになりはしな

いか。農業生活の内容はどういうものであつて、それにふさわしい教育はどういう形でなさるべきかということが明らかになりはしないか。

## (二)

農業教育は技術教育であるかどうかということについては異論がないわけではない。しかし技術というものを広く科学を背景にした行動形態、自然に働きかける形態というように考えれば、そこには立派に技術が存在している。しかし農業経営は、ただそういう技術のみでなく、農家一戸一戸が企業家であるから、そこには経営技術もまた必要である。特に昔とちがつて最近では、経営の問題はますます重要性をもつに至つた。ある人に言わせれば、経営技術の重要性に比すれば、その他の農業技術は物の数でもないという。つまり農業で自然に働きかける技術などはプリミティブで物の数でないというわけである。そういう所から農業教育は技術教育でないという人もあるのである。そういう点もないわけではないが、広い意味で、さまざまな技術面をもつてゐると考えれば、そういう技術を身につけるのがその教育の基本的なねらいであることは言うまでもない。

技術教育において従来からとられている方式は、学科にプラス実習という二本立ての方式である。学科は技術についての科学的な基礎を理解させるが、それだけでは技術の教育にならないのである。技術の教育となるためにはどうしても実習がなくてはならない。しかし農業学校においては従来から実習よりは学科に重きが置かれてゐる。つまり科学的背景を理解するという側に重点がおかれてゐる。そこには日本の農業の中において農業学校が果して来た役割というものがあらわれている。つまり余り農業の技術というものが教育の内容になる程はつきり存在していなかつたとも言えよう。しかし戦後十五年の間に事情は著しく変化して来た。農地改革が果した役割も大きかつたが、

農家が一個の独立企業体としてそれぞれの技術を駆使して農業の経営を行なうようになったのである。先に述べた農村青年の農業技術の研究の雰囲気もこのような事態を背景にして起つて来ているのである。したがって農業教育が技術教育としての形態をはっきりさせなくてはならぬのはむしろこれからであろう。そうなると現在の農業学校の教育は根本的に反省されなければならないものをもっている。それが最初に述べた、三年間の学校生活で、稲のことについての知識教育を唯一回与えられるという教育の仕方の問題である。しかも実習もその程度重要視されていないという教育の形が問題となるのである。

元来日本の技術教育は、技術教育の最も中心といわれる近代工業技術の教育でも学科と実習の関係ははっきりしていない。学科実習の関係はやかましく言われるのであるがしかも依然として二本立ての場合が多い。実習は実習、学科は学科となつて両者は関連が少ないのが常である。技術という概念は特に行動形態を表現するものとしていわゆる知識と区別されているが、それならば技術の教育においては、行動形態を問題にする実習がもっと重視されてよいはずである。学科は科学的な背景を与えるものであるから、行動形態の基礎になくなくてはならぬ。このことは誰も認めるが、さてその具体的な教育方式はどうなっているか、端的に云つて学科を主とし、実習を従とする考え方であり、両者はそれぞれ別個のものとして取り扱われている。その連関が考えられることはあつても、それはそれぞれ独立したものの連関を考へるといふ以上には出ていない。

農業教育が技術教育として確立して来るには、やはりこの点がはっきりしなくてはならぬ。農業技術教育においても主となるものは行動形態自体の教育であつて、それに科学的基礎の究明がつき従うべきである。今の実習と学科という概念を使つていへば、実習が主であり学科はその中に入れらるべきである。もっともそうなつたときは、果し

てこれまでの実習と学科という概念が使用できるかどうか。おそらく非常にかわつた形のものとなるう。(この点については、国立教育研究所紀要第二八集、産業技術教育に関する研究(その二)を参照)。

現在の農業高校の教育は技術の教育ではない。農業を概観させる教育でしかない。といつて経営伝習農場の教育もまた、科学的行動形態としての技術を形成するには弱い、この両者を止揚した所に新しい農業技術教育が生れる可能性があるのではないか。技術教育でまず大切なことは、生産技術的環境の中へ生徒をくみ入れることである。それは従来の教育では、学科と断片的実習の後に最後に生産実習として来るものと考えられていたが、むしろ逆にはじめにそれがなくてはならぬのである。そしてそれが科学的分析や技術的行動の条件に分化するのである。さてこうなると、従来の実習とは全く異なつたものとなるう。従来の実習は学科のあとに来て、それを実現するという標本の観察的な意味がつよかつた。そういうものでなく、まず実習であり、最後まで実習である。しかしそれは従来のものとまるで異なるから実習という言葉でよばない方がよいかも知れない。そうしてその新しい実習は、これまでと全然異なつた体裁をもつてあろう。まず観察、次に模倣、次に分析、整理、研究、次に新しい実践といった形をとるかも知れない。その中に従来の学科もくみ入れられていることになる。こういう農業技術教育をうち立てようとすることは、同時に農業技術をはじめ近代技術として確立することにもなるであろう。

### (III)

近代技術教育の場所として最も必要なものは、生産実習工場を中核として技術的環境であるが、農業技術教育において生産技術工場の意味をもつものは何かということが大きな問題である。今の農業学校が所有しているものはマイクロ実験的農場であつて、生産農場ではない。

模型にすぎないのである。一人で運転できる工場に百人の工員を入れては教育はできない。一人で運転出来る工場にはせいぜい四、五人を教育する能力しかない。そしてそれも前後には交代で一人が運転してみる所までもって行くべきものである。その程度の技術環境がなくては教育にはならない。

そういう技術環境は、一戸一戸の農家しかなく、つまり生徒の出身農家が最もよい技術教育の環境なのである。そこで三年の間くりかえして生産に従事しながら技術の形成をするということが最もよい教育の方式であることは明らかである。ただその技術環境が科学的に分析され、高度に組織された技術形態をもっていないことが問題である。すべてがそうだとはいえないが、そこに日本の農家のもつ技術のおくれがある。しかし最近は高くなって来たことも事実ではある。といって学校がそれ程高いものをもっていると言えないことも事実である。それは学校が生産農場を持たないことにもよる。実験室的なものとして高いものであっても、生産としては必ずしもそういえないということもある。そこで学校のもつ実験室的技術が、生徒の個々の農家で生かされればよい。学校の教師は生徒の農家を巡回して歩いたらい。生徒は一日の中半分、一年の中半分を自分の家で生産農場で働きつつ、それを観察し、分析し、整理したらよい、学校は家族ぐるみ農家の教育を引きうけて、技術の確立をはかったらよい。

このように述べて来ると、農業高校の従来の概念から余りにかけはなれていて、夢のように思われるかも知れない。しかし現にそういう学校がないわけではない。富山県の産業高校はそういう方式である。それもまだ本格的に自信をもってこれを農業教育の本体として運営するにまで至っていない。まだ試みの程度にとどまっており一般社会の認識も過去の農業学校教育の伝統的観念から抜けていない。しかし若し、今の全日制農業高校といわれるものが、新しくその全力をあげ

て産業高校方式をとり入れたら、農業技術教育は一新するであろう。そうして学校もまた、地域における実験室兼教育センターとしての意義を十分に発揮するものと思われる。今富山の産業高校を詳細に紹介するいとまをもたないから省略するが、基本的な考え方は農業技術教育の確立を目ざしているものである。

以上は農業小課程を中心にして農業自営者の教育を問題にしたのである。農業自営者の教育については、最近の農村の構造改革の問題とも関連してさまざまな問題が出されつつある。農業教育の分どまりが低いことも次第に問題になりつつある。そういう問題をどうするかもとり重要な問題であるが、全体として日本の資本主義社会の進展に伴い、農村が構造改革をとげなければならぬことは必然の勢である。そうなれば農業は次第に高度な技術を要求されて来るであろう。農業技術を確立した企業体としての農家、もしくは農家群が将来どういう形になるかを今すぐ予断することはできないが、何れにしても、高い農業技術者を擁する農業職能集団が出現して来なくては、今後の社会に適合しないこと確かであろう。そういう少数の精鋭者をどうして形成するかが産業高校の問題である。それには今のような天下泰平な教育、くさいものにふた式の教育では問題解決の任にあたれないのではないか。根本的な問題に目をそそぐことこそ重要ではないだろうか。その根本の問題とは農業技術教育の本格的形態を確立することである。

(国立教育研究所教育内容第二研究室長)